いそっぷの話

（六十二）鼠の會議

いつも、猫奴が、密と來ては、鼠を捕獲するから何とかして猫の近くに來ることを知る工風がなからうかといふので、鼠どもが澤山寄って、會議を開きました。いろ〳〵の案が出ました中で、一番、これてそといふ名案は、猫の頸へ鈴を結び付けて置けば宜からうといふ建議でありました。なる程、それならば猫の歩くにつれて、鈴がなるから、其音で以て忽ち猫の來た事が知れるので、之は、頗る名案と、一同手を拍って感心しました。所が、議長と見える一匹の鼠が、「然し猫に鈴を結び付けに行く者は、誰だ」と問うて見ると、行かうといふ者は一匹もなかった。

（六十三）猪と狐

猪が、或時、木の下に立って、一生懸命に、其牙を木の幹へこすりつけて居ると、狐がやって來て、獵夫も、犬も見えて居ないに、なぜそんなに牙を磨いで居るかと問ひました。猪は答へました。「今何も見えない中に磨いて置かんけりや、いざ鎌倉といふ時の間に合はぬじやないか」

（軍備は平和の確保なりといふ諺がある）

（六十四）年老った獵犬

或所に一匹の獵犬が居りました。若い時は、獵に

行って、中々他の獸を見逃す樣な事はなかったのでしたが、大分年老ってから、或時のこと、一匹の猪に出會ひました。夫と見るや、忽ち、飛びかゝって行って、耳へ食ひ付きましたが、悲しいことには、もう、すっかり齒が利かなくなって居るから、すぐふり離されて逃がしてやりました。主人は此有樣を見て、非常に失望して、いきなり、犬をなぐらうとしますと、犬は怨めし相に主人の顏を眺めて、「御主人樣、猪を逃がしたのは、私の罪でありません、私の精神は、今迄通り確なものです、併し、取る年には叶ひません、どうか、今の私をお叱り下さるよりは、以前の私をお褒め下さる事を願ひます。」と申しました。

（六十五）二人の友と手斧

或時のこと、二人連れ立って道を歩いて居りました。一人が、道に置いてある手斧を拾って、「オー君、僕は、手斧を見付けたよ」といふと、相手は隙さず、「イーヤ君、『僕』がでない、『吾々』が見付けたと言ひ給へ」やがて、暫くすると、手斧の持主が、すた〳〵と走って追っかけて來たので、前に拾った方が、眞青になって、「さあ、弱った、吾々は取っかまるよ」、すると、相手は、「なーに、君、さっき君の言った事を覺えて居給へ、其時、間違のない事なら、今でも間違ないだらう、『吾々』なんかいはないで、矢張『僕』といひ給へな」

（六十六）樫樹と葦

大きな樫の木が、大風に出遭って、根から、引っき抜かれて、河のズット向ふまで吹きとばされて、そこいらに生えて居る葦の中に落ちて、いふには「こりや奇態だ、こんなに輕くって弱々しい葦などがこ

の大風に、よく吹き潰されないものだなあ」、しますと、其葦どもが「そりやあなた、貴下は、此大風に抵抗して爭ふからいけません、私等は、ごらんの通り、ちよっとの風にも、直き頭を下げます、だからこんなに助って居ますのさ」と答へました。

馬の咄し

(一) 馬の忠義

馬が、人間に對して親しみの情を顯はすことは、犬や象にも劣りますまい。親切な主人の聲を聞き分けて、呼べば直ぐ飛んで來る事などは、ぢき覺えて仕舞ひまして、主人が居れば喜んで居るし、主人が留主にでもなると、何んだか不愉快な、引ったゝない風をして居ります、仕事でも、主人と一所なら喜んで仕ます。時々、知らぬ人に向っては、隨分亂暴な事はしますが、自分と親しい人には、餘程、ひどい目にでも遭はされんければ、決して不忠實な事は致しません。

夫で、忠義な馬のお話も隨分あります、今度の日露戰爭に於ても、まだ傳はる隙はありませんが何れ、可愛相な馬のお話なども、だん〳〵聞える事と存じます。

これは、西班牙での戰爭に付いての話ですが、佛蘭西軍の騎兵の喇叭手が、立派な馬を隊から與へられて非常に可愛がつて居りますと、馬も、此新主人に對して大層愛情を顯はす樣になりました。

其一例を云って見ますと、何處に居っても、一寸でも喇叭手の聲が聞こえるか、其姿が見えるか、尙驚くべき事は、喇叭の響きでも聞こえ樣ものなら、もう大騒ぎだ、中々、じっとして靜にはして居な